

2022年9月1日

謝 罪

— 検証報告を受けて、自省と今後に向けて —

主教 ステパノ高地 敬

「H元牧師性暴力事件における京都教区による二次加害検証報告書」を検証報告書作成チームから提出していただきました。この検証報告によってこれまでの経過を改めて振り返る機会が与えられました。

2005年以降に私が反省してきましたのは、人の思いに寄り添う神さまの在り方に仕えるべき教会が、「聞くことをないがしろにした」ということでありました。さらにこの報告をいただいて、この20年ほどのことを具体的に思い起し、特に過去の認識の在り方が今の自分を形作っていること、また「和解」ということについて考えさせられました。検証報告が出されたことを機に、これらについての思いを皆様にお伝えし、改めてAさんと関係の方々にも心よりお詫びいたします。また、教区運営の責任を担っているにもかかわらず、教区の皆様には大きな心配をおかけしてきました。本当に申し訳ありません。

今回の振り返りで最も考えさせられますことは、私は二次加害の加害者であるにもかかわらず、当初、元牧師から被害を受けた者としての意識が強かったのではないかということです。これがAさんの言われる「トカゲのしっぽ切り」の具体的な内容だったのではないか。それにもかかわらず、長くそれに気がつかなかったことをお詫びしなければなりません。しっぽを切ってでも自分を守る、それによってAさんをさらに傷つけていたのだと思いますし、このような感性が、今の自分にも大きく残っているのではないかと思います。私自身、かなり自己防衛的であるという弱さを持ちつつも、自分を守れば傷つく人がいるということを心に刻み、他者とどのように関わるか、常に課題として持って行かなければならないと考えております。

また、「和解」は双方の歩み寄りによって成り立つことであるにもかかわらず、「和解」による解決があると漠然と考えて、この言葉を当初から軽々しく使っていたことを今思い起こしますと、自分がなんと不遜であったかと思わされます。「和解」という言葉を使って、被害者の方からの歩み寄りを暗に期待してしまっておりました。「和解があるべき」のではなく、謝罪し、また振り返りを繰り返して、自らのありようを問い直し続ける。昨年のハラスメント研修で講師の方が、「赦してもらうために謝罪をするのではない」と言っておられました。赦すかどうかは被害者が考えることであり、加害者が謝罪するのは、今後のために自省し、自らの欠けを自覚するためでありました。

「体質改善」について常置委員会が動き始めたころ、「体質改善」とは具体的に何を意味するのか、今から思いますと、自分自身ほとんど分かっていなかったのではないかと思います。常置委員会は努力してくださっていたのですが、「ハラスメントをせず、聞く姿勢を持つ」ことを教区内の各部署に求めただけではなかったかと思えます。そこには私自身はどのようなかという視点はなく、「改善」を人任せにしておりました。今は、体質改善とは、自らを振り返り反省ができるように自分や組織を整えることなのだと考えております。この「振り返る」とは、自らの不完全さを率直に認め、神さまと人々に告白することなのだと思えます。「他人ごとではなく、自らの課題」だと受け止める。これも簡単なことではありませんが、私自身が繰り返し新たな気づきを与えられるよう求めていかなければならないと考えております。

一般に「自己肯定」とは大事なことで、どのような人にも組織にも必要ですが、肯定が強すぎると自己正当化、自己防衛となり危険なものとなります。事件の経過を振り返りますとき、Aさんの関係の方から指摘されておりますが、小さな教会の信徒の声は聴かず、同僚の言い分のみを聞き、私は自己正当化へと大きく傾いておりました。特に組織運営上の否定的な部分が全く見えなくなっておりました。そのため、「私たちの教会でそんなことが起こるはずがない」、「福音に仕えるあの先生がまさか」と

考えてしまい、過度の自己肯定の結果、被害者の気持ちをくみ取るどころか、さらに傷つけてしまいました。

「歴史認識」についての本に、次のように書かれてあり、自分に欠けた部分が指摘されていると考えさせられました。

- ・ 「過去の出来事を解決してようやく前に進むと私たちは考えがちであり、そのように考えるのが自然なのだが、過去を振り返るときにこそ新たな視点が与えられ、未来がより新しくなる可能性が拓かれる。」
- ・ 「加害者としての意識から逃げてはならない。自己批判のできる歴史認識だけが、他者の歴史を迎え入れることができる。」

まだ気が付いていない自らの至らなさがたくさんあるのだと思います。二次加害に気が付き始めた頃までだけでなく、今に至るまで二次加害を続けているのではないかという思いもあります。ただ、「私たちには様々な課題に向き合う力が神さまから与えられている」ということも今回学んだ大事な点の一つであり、どんな状況の中でも回心の機会が用意されているということに希望を置きたいと思っております。

検証報告で指摘されております人と人との力関係について、皆同じ神の子であるにもかかわらず、教区でも教会でもそのバランスが崩れることが多いのだと思います。京都教区は、そのバランスのありようを常にチェックすることを含めて、自らを省み続けながら歩む教会(教区)でありたいと心から願っております。その道がたとえ曲がりくねっていたり、後退があっても、信仰共同体としての教会は、完成を目指して旅し続けるものであるからです。

私は、人を傷つけ、罪を犯した教区主教であります。京都教区が今後とも過去をうやむやにせず、よりみ旨に適ったものとして成長し、宣教の使命を果たしていくことができますよう、皆様と共に祈り、歩んで参りたいと思います。